

評伝 矢田津世子(五)

花田, 俊典
福岡女子大学講師

<https://doi.org/10.15017/10523>

出版情報 : 文献探究. 8, pp. 56-68, 1981-06-07. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

評伝 矢田津世子 (五)

花田 俊典

川端康成は「文学界」昭和九年八月号誌上に発表し「エッセイ」へ女性作家の印象「矢田津世子氏」のなかで、天田の最近の小説「飛作」(「作品」昭九・一)と「主人」(「婦人文芸」昭九・七)にふれつつ、「この二篇の印象は私の予想に全く反してゐた」として次のようなことを言っている。

薔薇の花を見、西洋笛を聞くものと思つてゐた私は、凍つた土を見、木枯も聞いたのである。これが天田さんのまことの姿と信ずる前に、私は天田さんがこの頃味気ない日を送つてゐるのではないかと、なにか捜しあぐねてゐるのではないかと、疑つてみた。これは作品の印象以外からも考へられる。天田さんはこゝしばらく作品が非常に少なかつた。外出も殆んどしなかつたやうである。作品が變つたやうに、生活も變つたのかもしれない。

このあとさらに川端は、以前の矢田にはどこかしら「育ちのよささうな苦勞なさか、底に流れてゐた」けれども「二三日前会つてみると、少し瘦せて、なにかのやつれの後が澄んでゐるやうに見える」と語り、次のように結んでいる。

近作の「飛作」も「主人」も、不幸の記録である。その不幸は個人的なものといふよりも、漠然とながら、広い生活の重荷

から来るものであり、更に暗い大地の湿気さへ感ぜられた。以前の才華や機智は見られなかつた。私は矢田さんが苦勞してゐるのびと思つた。過渡期をうつつ向いて歩いてゐるのびと思つた。「文学界」の今度の作で、それがどうなつてゐるか、まだ読まぬから分らない。

しかしこの時期の矢田は、ここで川端も指摘するところ「過渡期をうつつ向いて歩いてゐる」との感がつよい。いつにいつ何が彼女をそこに追い込んだのか。

かつて天田が文壇に登場したとき、彼女がいわゆる拠点としていたのは「女人芸術」と「文学時代」とであつた。その「女人芸術」は昭和七年六月号をもって、また「文学時代」は同年七月号をもって、ともに終刊となつた。この事実には、矢田の文学を考へるうえで、ある象徴的な意味合いを持つてゐるように思われる。

周知のごとく「女人芸術」は女性の自由な言論発表の場として創刊されたが、以後しばしば左傾化の度合いをつよめ、ついには弾圧の激化と資金難と時雨の病氣などによつて終刊を余儀なくされた。結果的にはいさゝか暴走気味の左傾化が終刊と早めたと云はざるをえないが、そのような左傾化を安易に(すくなくとも表面的には)歓迎した「女人芸術」グループの左翼フアン的界隈の輕薄性もま

に、けっして見過ごすべきではないだろう。つまり、見方を変えて言えば、「女人芸術」の終刊とは、にば単に左翼的でありさえすればよかつた左翼流行の時代の終焉をもの語っていると言えよう。日本が例のごとく十五年戦争に突入して左翼陣営が本来の意味での真剣な闘争を眼前に迫られるとき、「女人芸術」は足かけ五年におよぶ全四十九冊の歴史とあえなく閉じにわけ、そこにこそ「あまりにも時代とともに皮相的な理解のなかで歩いた」（杯恵子）雑誌との評価の生まれてくるゆえんもあろう。

一方、「文学時代」もまた、時代の推移のまゝに行き詰まった。新潮社の純粋な商業誌であつた「文学時代」は、いわゆるモダンニズムの流行が下火になつたとみるや、さつそく翌月から大衆文芸誌「日の出」として再出発を遂げている。「文学時代」の終刊はモダンニズムの尖端とあまりにも皮相に追いつづけに当然の結果と見てよく、ここにもやはりひとつの流行の過ぎ去つてゆく姿を認めることができるだろう。

そして、この二誌の終刊という言うなれば悲劇は、とりも直さず天田個人のものであつた。もちろん天田が作品の有力な発表舞台を失つたという意味においては、従来左翼フアン的な、あるいはまたモダン派的な文章では職業作家として通用しない時代が迫つてきたという、その意味においてである。当然のことながら、天田が今後とも作家として生きぬいていくためには、是非とも自己のにしかかな文学を確立する必要がある。にばし、そのことを天田は徐々にしか思ひ知つていなかつた。よりである。

昭和七年後半、天田はあまり作品を発表していない。小説では「羨んで虚業」（「火の鳥」昭七・八）があるが、従来の作風と較べておぼかに派手さがなくなつていくくらいのもので、あとは全体的に見てさしづる変化はない。とはいへ、二ヶ月後に発表し随筆「露・アツペの事ども」（「作品」昭八・一）になると、かなり決みこんだ様子が顕著に見て取れる。

アツペ（人形）とは天田が飼つていた犬（スムース・フォックス・テリア）の名前で、このアツペを天田はにへん可愛かつていらしく、かつて随筆「春・私・アツペ」（「婦人サロン」昭七・四）のなかにも書いたことがあるが、それはともかくとして、「露・アツペの事ども」の内容をすこし見ておきたい。

「露・アツペの事ども」は「私」が毎夜アツペと一緒に露のなかに散歩に出かけるという日常の一齣を落着いた調子で描いたものだが、その散歩の途中で「私」は次のようなことを感じる。

こんやは、また、なんといふふかぶかしい乳いろの露だらう。出がけには、それ程までとは思はなかつたが、あゝ、やはり、露もまた、この谷あひのやうな、しんかんとひと気ない一劃を好んでゐるのだらう。

鎖かゝるんで、アツペの歩調が私に近づいた。
しろい。こんやは、なにもかもしろい。
しろい世界を、私にらはおにがいの足音をきき分けながら進んでいつた。

（中略）

しつとり類がしめつてきた。

霧のこめによるは風もなく、空気は甘ずっぱい、たとへば、砂糖漬のまるめろを含んでぬるやうで、蒸むくなく、かといって無気味な暑さでもなく、人間に抑制カといふ邪魔ものがなかつたならば、どこまでもどこまでも、そのひとすじの径を歩き続けていきにいやうな、そんなよる。

霧にいたしむことが私をほのかに満足させてしまふ。私は理由なく微笑し、話しかけ、吐息をもらし、泪ぐんで喚いて、まに微笑をしてしまふのだ。私は、こんな心の残儘を黙つてみているだけがいいのだからか。かなしみが湧き出てくる。

霧の中で、私は私の心をもいにいにしげにみつめる。すると、みつめられに自分が一層かなしげにすくんでしまつて。――ほつといた方がいい。霧の中で。

私はもうひとりの私をなぐさめ、もうひとりの私になぐさめられていく。――ほつといた方がいい。霧の中で。

そして、ふと気づくと、何かを「問いかけるやうなプツペの尖つた顔が私をみあげてゐる」。「私は脚をとめて、鎖をひきよせてしゃがみ、次のように思ひ。

片耳が狐みはいに立って、それがいかに彼女の精いつぱいの緊張を意味してゐるやうにも思はれる。プツペは何を緊張してゐるのだから。青くピカピカ光るこんやの彼女の眸をみて、ああ、やつと私は思ひあいつに。

投げやりな、気ままいっぱいのもうひとりの私と、やはり

投げやりな気よわい他の私が、もしも、泣き言をいひ愚痴をこぼしなから、この霧の世界の居心地よきに慣れてしまひ、帰ることを忘れてしまひやらないか、と、夕分彼女は気づかつてゐるのだから。

すなわち、ここに描かれている「私」の状態は、けつして野郎なものではない。「私」は、「ひとけのないところをよりによつて屯する」。「霧にいたしむこと」で「ほのかに満足」を覚えている。そして最後にかううじて、「この霧の世界の居心地よきに慣れろしまひ、帰ることを忘れてしまふ」うわけにはいかならう、と思ひいる。りかにも女性らしい陶酔的な文章を言つてよかううが、とまゆんが当時の天田の心情の反映であることはまぎれなきわけ、その点からすれば興味深い一文にはらがない。例の天田持存の（「母（ぼい）」）気がどりがまげきつていないことも見過ごしてはならないだろう。

この頃、天田は母と知り合つた（さきに述べたように昭和七年十一月頃と目される）。母の「二十七歳」によると、二人は「屢々会」い、「三月に一度は手紙」のやりとりをし、お互いの家へも行き来しつゝいた、というから、やはり恋人として、もしくはそれに近いものとして交際していらしい。

に、矢田は和田日出吉との関係と、その具体的な内実はどうであれ、依然としてつづけていた。また、大谷藤子と親しくなつて、彼女の同性愛的な感情をも受けつゝに、さらに近藤富枝の調査（「花陰の人」）によれば、友人の高橋鈴子は天田から「坂口さんてと

てもじろくするしい人。追いかけてらるるごとくしてしようがない」と打ら明けられたことか、あつたというし、天田の次兄不二郎は吾音に一度も会つたことがなく、二人のあいだの恋愛を否走しているといふ。どうもこのあたりの天田の感情や行動には複雑なところがあつた。どうもこのあたりの天田が文学をなかにわいて吾音を見ていたこと自体は、まづ疑いのないところであらう。

昭和八年のはじめ、「櫻」創刊のはなしが起つた。田村泰次郎は「わが文壇青春記」(新潮社、昭和8・3)のなかで、當時を回想して次のように書いてゐる。

八年の春頃のこと、大島敬司が一つの話を、私たちのところへ持ちこんできた。それはある出版屋が、私たちの同人雑誌をばしにといふのである。その出版屋といふのは、中西書店といふ名前だ、それまでは誰も知らなかつた。無名の出版社だ。いくらむさう意気の強い私にも若い作家でも、自分たちの同人雑誌が、経営上成り立つとは思わなかつた。話を聞いてみると、大島敬司の加つてゐるその同人雑誌をばすことで、「モダン日本」の編集長であつた大島から見返りとして、なにかの仕事の上での利益を得たいらしいから、大島と中西書店の主人とが、どんな關係をむすぶかは、私たちの知つたことではない。私には、その同人雑誌の計画にとびついた。坂口吾吾、井上友一郎、北原武夫、菱山修三、河田誠一、真杉静枝、矢田津世子、高見次雄江(小林秀雄の妹、田河水泡夫人)にらの一人々々が、どういふわけで同人としてあつた。なかには、いまはほと

んど忘れてしまつたが、いずれも元氣一ぱいで、逢えば文学の話に夜を徹したことも、にびにびである。私はいま思い返すと、これまでの自分の半生のうちで、あれほど昼も夜も文学の話に明け暮れたことは二度となかつた。

なお、田村は「櫻」のころ——矢田津世子と吾音の間——(「早稲田公論」昭和40・6)のなかでは、「櫻」に坂口を誘つたのは、私だつたように思うが、そのとき、彼は菱山修三と、天田津世子を仲間を誘うようにいふに、「云々と具体的経緯を述べてゐるが、やはりこの田村の記述はいささか頼りない。吾音の「二十七歳」には、次のように書かれていて、田村の証言とはくい違つてゐる。

そのころ「櫻」といふ雑誌がでることになった。大島というインテキチ千万な男がもくろんだ仕事で、井上友一郎、菱山修三、田村泰次郎、死んだ河田誠一、真杉静枝などが同人で、天田津世子も加わり、矢田津世子から、私に加入とすすめてきた。私は非常に不快で、加入するのが厭だ。だが、矢田津世子に、あなにはなぜこんな不純な雑誌に加入したのですか、ときくと、あなにと会うことができぬから、と言ふ。私は夢の如くに、幸福だ。に。私はニツ返事で加入した。

すなわち、田村は吾音が矢田を推薦したと言ひ、吾音は矢田から誘われたいと言つてゐるわけだが、文学的な美力からすれば吾音のほうがよき声がかつたことが想像される。しかし、矢田の背後には時事新報社の和田日出吉がいたのであり、あるいは和田の工作が裏にあつて矢田のほうがよきに加入を決めていたとも考えられなく

はない。総じて判断するなら、どうも田村の証言により信憑性があ
りそうだが、いまは何とも断言しかねる。

とまれ、矢田はこうして安吾とともに「桜」に参加した。矢田は
自己の文学の変革をせまられていたこともあって、安吾にもとくに
文学上の何ものかと期待していたようである。さきの田村の「櫻
のころ」には、次のようなエピソードが紹介されている。

「桜」をやっているときも、その発行と書店に任じていた関係
上、ある程度の部数の売れることを要求されていながら、それに
応えて、編集プランに、坂口は彼らしからぬジャーナリストイ
ツクな企画をばすことがあった。彼にそういう才能のあること
は、戦後の仕事でわかっていたが、当時の彼としては、私たちがび
っくりするような世間を認識した企画であった。ところが、そ
れを可決して、私たちが編集プランをすすめていると、つぎの
会合に矢田津世子が一枚加わって、いなりするものなら、ならま
ら、こんどは純粋な文学魂一徹の作家に早変わりして、自分のど
こにその編集企画を弾劾するのである。私には、いつも、そ
こで二度びっくりさせられるのだった。

そして、このあと田村は、「つまり矢田津世子の前では、^{マタ}料紙な文
学魂一徹の男でありにかつたのだろう。というのには、通俗小説を書
くことのむなしさに飽きつあつた矢田が、坂口安吾という人間に、
作家としての理想像を見ようとしていたからである。矢田は坂口に
尊敬していた」と書きしるしている。この田村の見解は、ことばの
ひとつひとつは必ずしも正確ではないが、まずは奇を得たものとい

ってよいだろう。矢田が安吾との交際を通して得たものは、けっし
て小さくはなかつたはずである。

「桜」創刊号（昭8・5）に矢田は、小説「防波堤」と隨筆「経
験と体験に就いて」とを発表し、「文学の新精神を語る座談会」に出
席者として名を連ねている。「防波堤」は第二号（昭8・6）まで
連載された作品だが、その書き出しの部分を次に引用してみよう。

最初私がその老紳士をみかけたのは山下公園においてである。
あれは去年の秋だった。御所山の管舎にゐる友人夫婦を訪ね
ての帰り、私はいつものやうにべんてん通りへ出た。雨あがり
の、しつとり濡れた木燵のあつらこつらには篠懸の朽葉が吸
はれたやうにくつついてゐた。人通りのすけない街。両側のほ
ろぼろしい飾窓がけはひしに老婦人と思はせてなんとなく心
ざむしく、その飾窓の広い硝子にうつつてゐる裸ぼりの篠懸
の木が、これも妙に飢えにさむざむしさを感ぜさせに。この街の
空が、董色に高く晴れてゐたのを私はかつてみにことがない。そ
の日も、逃げぬくれた雨雲が灰藍色の空低く漂ひ、風は幾分湿
りをふくんで皮膚に冷淡だった。

ばいばい全篇こういつに調子で書きすすめていられていて、そこにはさ
しに筋の展開は見られない。散文詩的な作品であるわけだが、ら
なみに安吾との関連で言うならば、「ふるさとに奇する讃歌」（「
青い馬」昭6・5）あたりとの類似を想起させる。か、ふるさと
に奇する讃歌」ほどの魅力は、「防波堤」にはないと言わざるをえ
ない。

「経験と体験に就いて」は、経験と体験ということばの意味上の差異を矢田なりに解説してみせにもので、その言わんとするところは次のごとくである。

「経験」は人生におけるひとつのファクトですが、ファクトそれ自身には智性がない。そのファクト（経験）を素材にして、思考力のプラスされたものがとりもなほす可体験ではないです。からか。思考力のプラスがせよ必要です。

こういつに意見はとり立てて矢田個々の飛想とか思想というほどのものではないが、たゞ、これまに母音との関連から見ると、この時期の矢田にこの飛想があるという事実はいささか興味深い。すなわち、当時の母音は人間における合理性に着目し、人思想の光の必要性をさかんに説いている。矢田が「智性」とか「思考力のプラス」とか言うのも、あるいは母音との会話のなかから自念なりに考えていつにのかも知れない。が、いずれにせよ、こうして矢田はいま一度、文學の何なるかを考へはじめたのである。

しかし、この「桜」も第二号を出したところではつまずいた。井上反一郎の回想（『泥絵の自画像』エポナ出版、昭52・11）によれば、「桜」は当初の期待に反して売れず、発行所の中西書房は第二号まででおりることになった。いろいろおめにあげくに、けっさよく井上反一郎を「編集長」として、もはやエポナをあてにせず、一般の同人雑誌と同じように、同人費で運営する方式に切りかえることにしたという。母音は昭8・10・12矢田宛書簡のなかで、「桜の会へは結局行」かずに「手紙で脱退」しにことを言い送りましに

と言っているが、矢田もまた、「桜」から離反した。大島敬司の無責任な編集運営の態度が同人にらのあいだでかなり批判のまじりになっていたらしい。

ところで、大谷藤子の「八回想の女友達・ワレ矢田津世子」へ「婦人公論」昭48・7には、次のような出来事が回想されている。

或る日、私が矢田津世子の家を訪ねて、二階の彼女の部屋で話していると、ふと窓から下の方を眺めれば彼女は顔が急に硬ばった。

「驚かないでね……何があっても……」

と彼女は言ったが、心が遠くへ飛んで行ってしまっ、にように思えに。

（中略）

まもなく階下から彼女を呼ぶ声があった。階下には戸塚署の特高の刑事が二人、待っていたのである。その二人がはい、てくるのを、彼女は二階から見ているのだった。特高刑事には職業からくる異様な或る身しい感じがあつたので、彼女は道徳的にの相違ない。

私の眼の前で、矢田津世子は拘引されていった。それは私にとって大変なショックだった。その日から二十九日間、彼女は戸塚署に留置された。左翼関係にわがかの金モカンパしににめだった。

この突然の留置事件のことは、『現代日本文学全集87 昭和小説集(二)』(筑摩書房、昭33・3)付載「年譜・矢田津世子」のなかに、

「(昭和)一〇年左翼のシンパ関係として戸塚署に検挙され、二八日間留置されたことがあり」と記されているが、近藤富枝の調査(『花陰の人』)によれば、矢田が検挙されたのは昭和八年七月二十二日のことであり、わが「十日余り」の留置で情状を許されたいというならば大谷はなぜ「二十九日間」などと細かな日数まで書まわっているのか(『筑摩版「手譜」』が「二八日間」としているのは検挙された当日と数えなかつたにめか)、あるいは別に同様の出来事があったか、といささか気にもなるが、とむかくここでは矢田が昭和八年七月末に検挙留置されたことのみ確認しておけば足りる。

以来、矢田は健康を考へた。床に臥せりからの日々がつづき、昭和八年後半は作品も殆んど發表していない(もちろん、そこには發表欲に恵まれなかつたことや、無理をしても書かねばならぬほどの意識と矢田が掴みえていなかつたことなど、様々な理由が附加されてこよう)。とはいえ、けつして文章から遠ざかつていたわけではなく、安吾や大谷や若園清太郎らとドストエフスキー研究会を持つたりしている。会の中は安吾にあつたものらしく、安吾の昭・引矢田宛書簡には次のようにある。

九月三日(日曜)午後一時、神楽坂紅屋(三階)(左記地図の通り)へ御参集下さいませより、このむね入谷さんへも御伝え下さい。尚当日ドストエフスキーのもので、御不用の本がありまゝなら、会場へ御持参下さいませです。言いたまはまゝに、えは即ち、ドストエフスキー研究の第一回打合せ会の御通知です。拜、

(地図ハ略ス)

この会がこれ以後何回開かれたかは不明だが、安吾の矢田宛書簡で次に見えるのは昭・10・12で、そこには「ドストエフスキーの会は、十五日、午後一時、僕の家へ御集まり願います」とある。しかし、矢田はこの会に参加しなかつたのであろう。安吾の昭・10・17矢田宛書簡には次のように書かれている。

御身体いかがですか。早速御見舞に行きたいのですが、僕も亦、少し身体が悪く、外出する度に、悪くかひどくなるので、大いにもならないのですが、この教日、外出できません。御養生專一に、早く御なおり下さい。

いすれ、御訪ねすることができようと思います。その折に、呉々も御大切に。

安吾

津世子様

この頃から矢田もあまり外出できなくなつて、いつしかドストエフスキー研究会も開かれなくなつたようである。

そして、矢田のもとに安吾が病氣見舞にや、てきたのは約一ヶ月後のことであつた。安吾の昭・11・18矢田宛書簡はその直後のもので、次のように書き出されている。

先晩は失礼いたしました。貴女の健康は決して上乗ではないようですね。疲労と倦びしさがいつも流れているように見受けられます。肉體は急にとりまわることができないでしょうが、殺刺と一に元氣一杯の精神力を忘れぬようにして下さい。反逆

の沈んだ様子を見るのは苦痛です。憂鬱は僕だけで沢山なんです。自分の憂鬱だけはどうにもならないので、せめて友達の前で、気な姿を見ていいのです。

ここで見過ごせないのは、この「眠」の矢田がわざわざ見舞に訪れに、母吾に對して、「疲労と倦びしきかいつも流れているように」な「沈んだ様子」しか見せていないことである。ほかならぬ母吾の訪問に、なぜ矢田はこのような態度をとったのか。もし矢田が母吾の訪問を待ら望んでいたのでなら、「肉体は急にどうすることもできなくとも自ら「發刺」として元氣一杯の精神カレの一端なり奮い立たせにぞろろし、またぞろするよう努めにであらう。敢て極言すれば、母吾の文面はそうい、に矢田のどこか頑なに閉ざしに心への抗議と見なして當と失してはいないだろう。

じつは當時、矢田のもとへは入谷藤子かしばしば通ってきていた。入谷は矢田に同性愛的な感情をつよく抱いていたようで、矢田のほうもまた、かなりそれに応えていたふしがある。二人の關係については近藤高枝が「誅教（るいか）」（「婦人公論」昭四・12臨時増刊号）で詳しく描いているが、それによるとこの時期の矢田は入谷との交際には、よく夢中で、たとえばさまの母吾の訪問の教日後には次のような手紙を入谷に書き送っている。

貴方が帰られに後、非常にさみしかつた。貴方はけひひとつの疑問符とのこしていかれた。この疑問符が私をいま悩ましてゐる。私は貴方を追つていかうとし、靴をはいた。そしてやめた。やめには例の私の臆病である。

貴方は友情に就いて語つた。貴方は友情にひとつの理想を有つと仰言る。その理想と疑問符として貴方は帰つていった。

私は考へる。私はその？と考へる。私の前に、貴方はいままだな松で現はれてゐる。

私はそれ以上の貴方とのどうもとはいへない。私はあるがまゝの貴方の松を尊敬し心からうにれ、私の愛情をかむけてゐる。愛情どうなのですか。私は私の熱情をやはり愛情と呼ぼう。

貴方は私の裡にそれ以上何を求めようとされるのですか。私は苦しくなる。私は苦しくなつて、どうしていいのかわからない。貴方ののこしは？はそれ程私を悩ましてゐる。

しまりに頭が熱い。私はにえ、貴方のイリージョンをみる。これがいまの私なのだ。

二十四日夕 津

すなわち、これほどまでに矢田は入谷にのめり込んでいるわけである。いはうといふ母吾どころではなかつたのかも知れない。矢田を訪問しに母吾はそのことを（具体的にではないにせよ）痛感して、おそろしく悄然として帰途についていたのである。だろう。

さらに想像を逞しくすれば、この訪問によって母吾は矢田にひとつの見切りをつけにのではないだろうか。母吾の矢田に對する思いは、「二十七八歳」に登場する例の「黄さん」事件以後、はげしく揺れていった。

ある日、酔つた。貴さんが、私に話をして。時事編輯局長だか総務局長だか、ともかく最高幹部のWが矢田津世子

と恋仲で、ある日、社内では日記の手帳を落した。拾ったのが黄さんと、日曜日に矢田津世子とアイビキのメモが書き入れてある。黄さんが手帳を渡したら、大慌てでポケットへもぐりこんだという。黄さんはもとより私が矢田津世子に恋していることは知らないのだ。居合せにのが誰々だったか忘れながら、みんな声をたてて笑った。私が、笑い得べき。私は苦悩、失意の地獄へつき落された。

母は矢田と結婚するつもりだった（「二十七歳」）というから、衝撃もそれなりに入ったのだろう。「二十七歳」にはまた、次のように書かれている。

私も、亦、矢田津世子を恨む心はなかった。なじる心もなかった。矢田津世子は、私に向い、一緒に旅行しましょうよ、登山したい、山の温泉へ泊りたい、と言う。私はにだ笑い顔によって答えるだけだ。その笑い顔は、私の心はあなたのことではない、いつもあなたを思いつづけている、然し、私はあなたと旅行はできない。旅行して、あなたに因体を知ると、私はWと同じ男に成り下るような気がするから。あなたにとって、私が成り下るのではなく、私自身にとって、Wが私と同格になるから。私はあなたに就いて、Wのことなど信じたくないのだ。それを忘れてしまいたい。それを知らずにあなたを恋したあのままの心も、私は忘れたいのだ。と。もとより私の笑い顔がそのような意味であることを、矢田津世子が解さうる由もない。

もちろん、この母の回想は、いわゆる事実としてすべて信用できるものではないが、だいたいいこういって、精神状況に当時の母が追い込まれていたこと自体は、まずまちがいないと見てよいだろう。ちなみに言い添えておけば、母が「黄さん」こと笹本黄から聞いたのは矢田と和田日出吉（「W」とが「恋仲」という噂ではなく、「原稿の売り込みからんだ醜行」というふうには伝えられていた）（高見順『昭和文学盛衰史（一）』）噂に近いものであったはずであり、そうであつたらしく母は「Wと同じ男に成り下がるような気がする」と云々とひそかに煩悶したのであるだろう。

そして秋、十一月なかばに母が久しぶりに矢田を訪問してみると、矢田は終始「沈んだ様子」しか母のまえに見せなかった。それだけでなく、母はつい矢田の本心を見失いからの状況に置かれていたのであるから、その人恋の頓挫を痛感したのであろうことは想像に難くない。ただ、そのとき母は矢田の背後に和田日出吉の存在を見据えくはいても、大谷との同性愛的な関係に矢田がいつは心を奪われていたことには気がついていなかったのだろう。

やがて、母は去っていった。母の昭9・2・11および昭9・4・29矢田宛書簡によつて、ある程度その具体的な経緯を知ることができる。まず昭9・2・11書簡と見ておけば、その書き出しは次のごとくである。

長らく御無沙汰にいたしました。本ありがとうございました。元旦匆々一頁の死があたりして、すつかりくさつていまし、それが、それ以来風をひいたり胃を悪くしたり散々な目にあつ

て快々と暮してしまいました。

昨年未でーたか、カッチンと野口君とが遊びに来てくれましたが、それ以来カッチンにも会いません。

ふるさとでは稀有の雪とか、二階屋が雪の下に埋れてしまっただけで、送られてきて、吹雪の誘惑にひかれていますが、つい行くこともありませんでした。

元且以来、東京へ出たことが、たゞ一回あるばかりです。

ここから、二人が「長らく」会っていないことが知れる。母音が「昨年未」の消息を伝えているところからすれば、昭和八年十一月以後、二人が会う機会はないのであろう。そして昭和九年二月はじめ頃、矢田が何かの「本」を送ってきたので、母音がこの礼状を兼ねた書簡を出したわけである。このあと母音は友人の谷丹三のこゝとを話題にして、さらに次のように手紙を結んでいる。

キザなメランコリイは避けなければなりません。きつと、冬の寒さがいけないのだと思います。

でも、貴女は御元気で何よりです。そして、きつと、勉強していらっしやるでしょう。僕は長らく不勉強でした。力がなかつたのです。親しい人々のことを考えては、考え疲れてうんざりしていったようなものです。お目にかかりたいと思っっています。そのうち、きつとお訪ねします。もし、お暇の折がありましたら、如針散歩のつもりで、遊びにいらして下さい。どんなに嬉しいか知れません。

母音

津世子様

しかしながら、母音は矢田を訪ねなかつたし、矢田もまた、母音のところへはやってこなかつた。つづく母音の昭々・4・29書簡の内容は、おおよそ次のようなものである。

御便りありがとうございます。御元気で何よりです。一度お訪ねしようと考えていましたが、近頃身体が弱っていて、先月と今月で、もう五回も南の方へ旅に出ました。(中略)

せ。かく御訪ね下さった登山倶楽部は、どうしようかと、はまだ考之中です。私のこの疲労では、紳士のつまあいが最も苦手なのですが、私の心には冬の風さ吹まはじめているのですから、団欒の中で心愉しく落付いていられるでしょうか？ 私は怖れています。

そのうち、お訪ねして、お話ししたいでしょう。私のわがままをお許し下さい。私は突きつめた頂点のものでなくては、今何もできないのです。世間話もできません。そして、たゞ酒とのむこが私を救ってくれます。そして、毎日仕事をしていないならばならないのです。

落付いた人を見ると悲しくなりますね。早くカモとりもどしたいと思えます。

呉々も御元気でいて下さい。あなたにの幸福と、爽やかな生活を祈っております。

津世子様

母音より

すなわち、今度は矢田は母吾に「登山倶楽部」への参加を誘って、
母吾から断わられている。母吾は、「私のこの疲労では、紳士のつ
まあい、最も苦手なのでおが」云々とていよく理由を述べ立てては
いるが、じつは「先月と今月で、もう五回も南の方へ旅に出」たの
は、「いすこへ」へ「新小説」昭21・10に描かれた「女」(蒲田の
場末のバー「ボヘミアン」のマダム「おせ」と一緒だ、にわけて、
当然矢田の誘いに応じることは許されなかつたのだらう。と言うよ
り、「呉々も御え気でいて下さい。あなたにの幸福と爽やかな生活と
祈っております」といった手紙の閉じ方から推測すれば、もはや母
吾はひそかに矢田との離別を決意していたと見受けられる。

つまり、矢田は昭和八年十一月に母吾の訪問を返して冷たくあし
らったものの、それ以後母吾から何の音沙汰もなくなつてみると、
かえつて母吾のことが気になりだした。そこで翌九年二月、「本」
に手紙を添えて母吾に連絡をとつた。母吾からは「そのうち、ま
とお訪ねしますし云々との返事が来たが、いつこうに母吾はやつて
こない。再び四月に今度は「登山倶楽部」に誘つてみたが、やはり
断わられてしまつた。去られると妙に心が煮かゆるというところもあ
る。そんな気持ちに矢田はなつていたものだらう。母吾にしてみれば、
そのへんの矢田の微妙な心理のゆゑが即座にわかるよしもない。母
吾は後年、「世に出るまで」(「小説新潮」昭30・4)のなかで当
時を回想して次のように語っている。

私はこの愛情に疲れきつてしまつた。そして、全然愛してい
ないあるバーの女と同様したのは、矢田津世子を忘れない一念

であつた。自分をバカにしたい一念からであつた。私は私自身
をバカにし突き放してしまいたい一念であつた。に拘らず、矢田
津世子は私に裏切られたいような怒りをいだいたようであつた。

思いもよらないことであつた。
もつとも、矢田が母吾に封しては、まりと「裏切られたいような怒り
をいだいた」のは、のちに母吾が「あるバーの女と同様」している
のを知らされたときであらうが、この段階においてもすでに矢田が
何か言ひようのない淋しさなり倦しさといつたものを痛感していた
ことは十二分に想像できるところだらう。

一方、矢田と入谷との関係は、依然としてつづいていた。さきの
「誄歌(るいか)」によれば、二人は昭和九年半ば頃には「共同生
活を考ふるようになった」といふ。

私はいろいろ考えてみまふ。勿論貴方とのよき生活について
です。いつたにどういふにらいいのでせう。

私は泣き出しに程どろりしても貴方なほは過せません
津

これは当時の矢田の入谷宛書簡として紹介されているものだが、そ
の後二人は伊豆へ旅行し、その「温泉宿で藤子が求めぬに矢田は
「応じなかつた」といふ。「誄歌(るいか)」には、「しかしこの
事件のあとでも、友情はこわゆず、」藤子は一時の激情を恥じ、
津世子に懇願したしと書かれているが、もちろん矢田にとつては意
想外の衝撃的な出来事だつたにわけて、かなりの動揺を覚えたものと
思われる。けつ、まよく矢田は入谷を許し、二人は終生その人友情

関係を保つたが、當時はらふようど入谷の「半生」が「改造」の懸賞小説に当選したとまであつたがゆえに、矢田の心にはいつそう複雑なものがあつたのであろう。

しかもこの時期、矢田は家庭的にも苦境に立たされてゐた。『花陰』の人の一節を次に引いておこう。

兄の不二郎がまた名古屋へ転任になり、心を残しながら東京を去つた。下落合の家には、母のチエと津世子と二人になつた。事件というのは、姉のツヤの嫁が先である武藤商會が、一万数千円を脱税したといふかどで摘発を受け、武藤三治が収監されたのであつた。しかもこの武藤商會の復員のなかに、不二郎が加えられてあつたため、責任を問われることになり、家財はもらろん、名古屋で受ける不二郎のサラリーも、最小限の生活費と残して押えらるゝといふ話があり、矢田家はみじめな思いに閉ざされたのである。不二郎は復員といつても名義だけで一種の利益配当を受けただけではなかつた。二年前に武藤商會が破産しかけたとき出資者といふことにされ復員に名ばかりを連ねたのである。

しかも長兄稔はいまだに病床生活をつづけていて、生活費の保証を不二郎が行つてゐた。稔には十三も頭に子どもが四人いて、なにかとかがりかぶる、不二郎も苦しんでゐた際であつた。すなわち、このような事件に矢田家はまき込まれてしまつたのである。不二郎は名古屋に転勤し、矢田は下落合の自宅に母と二人で住むようになった。もとより生活していくだけの原稿収入があるわけ

ではなく、不二郎の援助で何とか生計を支えていたにすぎない。ついに矢田は自宅の「二階を、古くからの知人の女学生に借りてもらひ、なにかしらの家賃をもらうことにした」といふ。『花陰』の人は、いまに、次のような矢田の昭九・ワ・十五郎部清子抱書簡を紹介して興味深い。

母も日と共に、古いこむやうに思はれ、心ほそくて、何かと母を恨む事も無きか、とこの頃はそれのみです。外へ出て母の事が心かかりにて、おちおち長話も出来ぬといふ仕末、まるで母を子供にし、私が母親にでもなつた心地です。

さきに川端が矢田から受けた印象を矢田にぞくぞくして具体的にまくつていくなら、およそ以上のようなことが浮かびあつてくるのである。文学的にも、家庭的にも、また交遊関係においても、この時期の矢田はけつして自らの意図し願ふところを實現できてはいない。偶然による不幸と背負つた部分もあるし、また自業自得の結果とよばざるをえないところもある。その意味あいをこめて、川端の印象に領したとしても、あなから矢田ではないだろう。総じて見るなら、なるほど「過渡期」であつたには違ひないのである。

ただし、矢田の文学子に、わすかの光が見えてきたこともまことに言ひ添えておかなばならない。川端が「まきのエッセイの末尾に言う」「文学界の今度の作」、すなわち「旅役者の妻より」(「文学界」昭九・八)は、以前の作品と較べて矢田独自の世界をいくらかなりとも築き立てているといつてよいものである。詳しくは次回にふれる。

ので、ここではひとまずそうとだけ言っておくことにしたい。

(つづく)

注

(1) 「主事同人誌・文芸談解題」(『女人芸術』) (『女流文芸研究』南窓社、昭48・8)

(2) 田村の回想を受けて関井光男は「伝記的年譜」(『舟本坂口安吾全集』第十三巻) および「彌平傳評伝・坂口安吾とその時代」(『国文学』昭54・12) で、安吾は田村から誘われ矢野は真杉静枝から誘われて「桜」に加わるとし、また井上友一即ち日泥絵の自画像(『前出』)のなかで、「坂口安吾と仲間に入れにの彼(『田村、花田注』)である」と語っているが、やはり早急には断定し難いところだろう。

——福岡女子大学講師——